

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：12103

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06075

研究課題名(和文) 中等・高等教育における聴覚障害者向けの助詞検定および関連教材開発のための予備研究

研究課題名(英文) Developing materials for learning Japanese postpositional particles for hearing-impaired students

研究代表者

脇中 起余子(Wakinaka, Kiyoko)

筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・准教授

研究者番号：30757547

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：格助詞や副助詞、接続助詞、接続詞が中心となる助詞問題について、897問を5名の協力者に提案して協議した結果、35問を削除し、26問を新規追加した。また、問題文を微修正したものが79問、答えの範囲を変更したものが11問、問題の出し方(「複数回答可」「1つだけ選べ」「2つ選べ」など)を変更したものが113問、大幅変更が42問であり、残りの617問は変更なしであった。筑波技術大学の聴覚障害学生に実施し、その結果から問題を易レベルと難レベルに分けた。全体的には、特に授受構文に関わる助詞の扱い方のところで成績不振が目立った。これらの問題は、Web(パソコンや端末機器)で誰でも取り組めるようにした。

研究成果の概要(英文)：After discussing a preliminary list of 897 problems about case-marking particles, adverbial particles, conjunctive particles, and conjunctions with five collaborators, I deleted 35 and added 26 new problems. In addition, I revised 79 problems slightly, changed 11 answers, changed how to ask 113 problems ("multiple answers allowed", "choose only one", and "choose two"), and substantially modified 42. I did not change the remaining 617. Based on the results of the tests with the hearing-impaired students of National University Corporation Tsukuba University of Technology, I divided problems into easy and difficult categories. The problems are now accessible by anyone on the internet.

研究分野：聴覚障害教育

キーワード：助詞 聴覚障害児教育 格助詞 副助詞 接続助詞 接続詞 授受構文

1. 研究開始当初の背景

従来の研究では、聴覚障害児の一般的な学力は小学校3年生～5年生のあたりで横ばいとなっていることが指摘されている。特に助詞に関する問題でつまずきが見られる。

聴覚障害児における助詞の獲得状況に関する調査研究はかなり見られるが、その調査で扱われている助詞は格助詞が中心であり、副助詞や接続助詞、接続詞に関する調査や、高等教育を受けている聴覚障害者を対象とした網羅的な調査、つまずきの原因に関する分析研究は少ない。

2. 研究の目的

(1) 中等・高等教育を受ける聴覚障害者を対象とする助詞・接続詞に関わる問題の作成

筑波技術大学の聴覚障害学生(以下「学生」と称する)を見ると、「から」には「行為の起点」や「材料」の意味があるといったいわば「助詞の機能」はほぼ理解できているにもかかわらず、適切な助詞や接続詞を選べない例が多い。初等～中等教育を受ける者に対しては、簡単な語を使った短文によって「助詞の機能」の理解状況を調べる方法でよいが、中等～高等教育を受ける者に対しては、抽象度の高い語を用いた問題や前後の文章を読まないと解けない問題も必要である。ろう学校中学部や高等部で使える助詞問題の作成を試みるも、答えの範囲が定まらず断念した話を何回か聞いているが、今回、5名のろう学校国語科教員などの協力を得て、筑波技術大学やろう学校中学部・高等部で使える助詞問題を作成する。

(2) 中等・高等教育を受ける聴覚障害者を対象とする助詞指導教材開発のための予備的研究

助詞問題を学生に実施して、助詞(格助詞・副助詞・接続助詞)や接続詞の理解状況を具体的かつ網羅的に把握し、どのような問題が難しいかを分析すると同時に、問題の妥当性を再検討する。確定された助詞問題(「助詞検定」試用版)は、ろう学校や研究会で公開し、誰でも取り組めるようにする。

3. 研究の方法

(1) 問題案の作成と協力者への提案

拙著『助詞の使い分けとその手話表現』(1～2巻、北大路書房)で作成した問題を基盤にして897問を作成し、5名の協力者に答えや修正意見を記入してもらった。筆者も含めて6名の意見が一致するまで、何回か改善案を提案した。最終的には、答えの範囲が「6名：0名」または「5名：1名」となった問題のみを採用することとし、「6名」または「5名」が選んだ回答を「正答」とした。平成27年度は格助詞を、平成28年度は副助詞、接続助詞、接続詞を中心として検討した。

(2) 聴覚障害大学生への実施

(1)と並行して、問題を学生に実施し、問題の妥当性を再検討した。また、特に正答率

が低かった問題を取り上げて、筑波技術大学の講義(日本語表現法A・B)の中で解説したりして、学生の正答率が低かった問題の分析やその原因の検討を行った。

(3) Webで取り組める環境の整備

会社に依頼し、パソコンや端末機器(スマートフォンやタブレット)で取り組めるように整備した。

4. 研究成果

(1) 問題の確定とWebでの実施の可能化

助詞問題を、場所、時間、主体、授受・受身・使役、対象、手段・原因・状態、格助詞の「と」、「が」と「は」、並立や添加、比較や程度、限定や強調、順接や継起、逆接、言い換えや転換に関わる問題に分類した。

～は格助詞が中心であり、545問を5名の協力者に提案して協議した結果、21問(3.9%)を削除し、24問を新規追加した。また、問題文を微修正したものが53問(9.7%)、答えの範囲を変更したものが7問(1.3%)、問題の出し方(「複数回答可」「1つだけ選べ」「2つ選べ」など)を変更したものが60問(11.0%)、大幅に変更したものが29問(5.3%)であり、残りの375問(68.8%)は変更なしであった。

～は副助詞や接続助詞、接続詞が中心であり、352問を提案して協議した結果、14問(4.0%)を削除し、2問を新規追加した。また、問題文を微修正したものが26問(7.4%)、答えの範囲を変更したものが4問(1.1%)、問題の出し方を変更したものが53問(15.1%)、大幅変更が13問(3.7%)であり、残りの242問(68.8%)は変更なしであった。

確定された888問において、5名の協力者および筆者の答えが完全に一致した問題は846問(95.3%)であった。「5名：1名」の「1名」になった問題数は、最も多い協力者で14問(1.6%)であった。

例えば、最初に提案した問題「計画{が・を・で・に}失敗する」では、いろいろな意見が出され、別の問題を複数作成したが、それでも答えの範囲が一致せず、最終的には「彼は、プログラムのインストール{が・で・に・を}失敗した。答えを2つ選べ。答えは『に・を』」とすることで、6名中5名の意見の一致をみた。

「ペットボトル{で・から}服を作ることができる」では、6名中5名が「複数回答可、答えは『から』」という案に同意したが、最終確認の段階で、「時間がたち、改めて考えると、『複数回答可』より『答えを1つ選べ』のほうが良い」という意見が新たに出されたため、そのように変更して良いかを再度全員に尋ねて了解を得た。

このように国語科教員であっても意見が分かれる問題が多く、中学部や高等部の生徒向けの助詞問題を作る難しさを再確認した。

この問題を筑波技術大学の聴覚障害学生

に実施し、正答となる選択肢を選んだ比率がいずれも80%以上で、かつ誤答となる選択肢を選んだ比率がいずれも20%未満となる問題を「易レベル」とし、それ以外の問題を「難レベル」とした。

その後、会社に依頼して、パソコンや端末機器で取り組めるように整備した。

図1は、Webに出る問題の一例である。「複数回答可」の問題で答えを選ばなかったり、「1つ選べ」の問題で答えを選ばなかったり複数選んだりした時は、エラーメッセージが出るようにした。

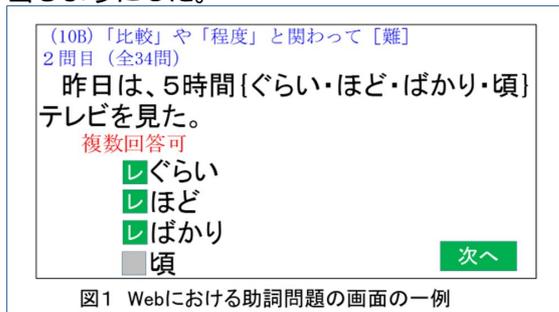


図1 Webにおける助詞問題の画面の一例

図2は、全ての問題に回答し終わった時に出る画面である。「あなたの正答率は50%、ある年度の筑波技術大学の聴覚障害学生の平均正答率は92%」「(選択肢の順に)正解は○×○×、あなたの回答は○○××」などが出るようになっており、回答後、正解と自分の答えを照らし合わせて見られるようにした。

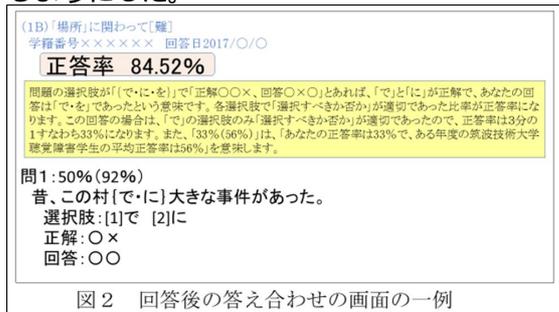


図2 回答後の答え合わせの画面の一例

図2 回答後の答え合わせの画面の一例

(2)聴覚障害学生の困難点の分析

学生に実施した結果、全体的には、「複数回答可」の問題でどこまで正解とするかの判断が難しい例が多く見られた。

その他、特に以下の点で弱さが見られることが判明した。

授受構文における助詞の扱い

「あげる」「もらう」「くれる」を混ぜた問題を複数実施したところ、「くれる」が含まれた選択肢を選ばない学生が多く、選んだ学生の4~9割が助詞を適切に使えていなかった。そこで、別途「AがBにあげる(もらう・くれる)」のそれぞれで「A B」と「A B」のどちらの意味かを尋ねたところ、「あげる」「もらう」では、ほぼ全員が正答したが、「くれる」では、3~4割しか正答しなかった。

さらに、「ウチソト」との関連で、「店の人が娘に~あげた」より「娘が店の人に~もらった」あるいは「店の人が娘に~くれた」のほうが自然な言い方であるが、70%の学生が「店の人が娘に~あげた」を自然な言い方であると回答した。

「くれる」と「もらう」の微妙な違いの理解も難しい。例えば、30%の学生が、「母のことばに、私は落ち着かせてもらった」は自然な言い方であると回答した。

これらの結果から、授受構文指導の第一のバリアは、助詞と物や行為の方向性の関連の理解であり、第二のバリアは、「ウチソト」との関連の理解であることが判明した。

筆者は、聴覚障害者に多い視覚優位型や同時処理型の認知特性をもつ人は、いわゆる「一人称的思考」や「虫の視点」をもつことが難しく、物理的事実のみに注目することから、授受構文においても、物の方向性にしか目を向けず、ウチソトとの関連で文章の正否を考える機会が少ないという仮説を抱くにいたった。今後、「ウチソト」の視点との関連で日本語を学べる教材の開発が必要であろう。この教材は、特に「虫の視点」をもつことが苦手な子どもを念頭に置き、アニメーションなどを効果的に用いて作成する必要があると思われる。

ウチソトが絡む日本語:80%の学生が、「私は食べたがる」は自然な言い方であると回答した。また、58%の学生が、「田中夫人は家を自慢したいから、敬遠される」と「田中夫人は、家を自慢したがるから、敬遠される」の両方とも自然な言い方であると回答した。この「ウチソト」の概念の理解は、敬語の理解にもつながるが、敬語の指導の難しさもよく指摘されるところである。

「~したところが」と「~するどころか」、「行くなり」と「行ったなり」など、文字のうでで似ている語の違いが理解できていない学生が多かった。

「~ので」と「~から」など、手話が同じになる語の使い分けに弱さを残す学生が多かった。例えば、「閻魔大王に舌を抜かれる {から・ので}、嘘をつくのはやめなさい」という問題で、「ので」を選んだ学生が37%みられた。

その他、以下のような指導の難しさがあることをまとめた。

「助詞の機能」を覚えさせる指導の限界: 「駅に行く」「駅へ行く」「駅まで行く」はいずれも正しく、同じような意味であるが、「東の方{に・へ・まで}向かう」で27%が「まで」を選んでいてことなどからもうかがえるように、助詞の微妙な使い分けの理解は非常に難しい。

助詞と動詞をセットで覚えさせる指導の限界: 「~に座る」のように「に」と「座る」をセットで覚えさせる指導があるが、「通勤電車{に・で}座れる確率を高める」で22%が「に」を選んでいて。したがって、助詞と

動詞をセットで覚えさせる方法には限界があることがうかがえる。

簡単な語を用いた問題を使った指導の限界：「明日学校{で・に}プールがある」や「学校{で・に}大きなプールがある」では、「プール」の意味を考えて答える必要があるが、9~10割の学生が正答できていた。その一方で、「図書室{で・に}広報委員会がある」で56%の学生が「に」を選び、「昔、この村{で・に}大きな事件があった」で47%が「に」を選び、「そのがんセンター{で・に}は、中央病院、東病院、研究所など計6つの組織がある」で42%が「で」を選んでいたので、抽象的な語彙が混じると難しくなることがうかがえる。

助詞の重なりを考慮に入れた回答の難しさ：「続けるかどうか{が・で・に・の・を}議論した」であれば「を」は正解の一つとなるが、「続けるかどうか{が・で・に・の・を}議論をした」において46%の学生が「を」を選んでいたので、半数近くの学生が問題文の中の「を」の存在に注意を払っていないことがうかがえる。「僕たちが2人{が・で・でに・に}考えたんだ」では、既に「が」が文の中にあるので「が」は正解ではないが、40%の学生が「が」を選んでいたので、問題文の中の他の助詞に無頓着な例が多い。

手がかりが後のほうにあることによる難しさ：「入口で用紙を渡されたが、どこ{に・で}記入すれば良いのかわからなかったので、尋ねたら『控え室です』と言われた」では、後の「控え室」が回答の手がかりとなるが、38%の学生が「に」を選んだことなどから、文章の後半を読まないで答えられない問題に弱さをもつ学生が多いと言えよう。

助詞の存在によって語順が変えやすいという日本語の特性からくる難しさ：「彼に本を渡す」と「本を彼に渡す」のように語順を変えられるという日本語の特性を理解すると、「駅前で銅像の下に集まる」と「銅像の下に駅前で集まる」の両方とも言えると解釈した学生が約2割みられた。

読解を必要とする問題の難しさ：「~{まで・までに}~する」「~{に・へ・を}を登る」「水{で・に・を}流す」などは、文脈によって答えが決まるが、読解を必要とする問題の正答率が低い傾向が見られた。

慣用句を知らないことによる難しさ：「町{で・を}わが物顔に歩き回る」で47%の学生が「で」を選び、「二人は、婚約相整い、結婚式を挙げる運び{と・に}なりました」で59%の学生が「に」を選んでいたので、慣用句と関連がある問題の正答率が低い傾向が見られた。

(3)今後の課題

ある会社の報告によると、スマホを使用した場合、PCを使用した学習者の約2倍の学習者が英語学習を完了したという。スマホは、電車の中や待ち時間を利用して簡単に使え

ることから、助詞問題についても同様の学習完了の効果が期待される。

今回確定した助詞問題は、平成29年度からWebで取り組めるようにしたので、今後は、長期休業中などの宿題として出すことやろう学校における自立活動や自習時間などの中で取り組むことが可能になった。しかし、正解となる理由の説明がついていないので、自学自習教材としては不十分である。この点の改善が、今後の大きな課題の一つとなる。

例えば、「さっきの蛇、すごく大きかったね。2メートル{ぐらい・ほど・ばかり}だったね」の問題において、『ばかり』には確かに『約』の意味があるが、『驚くぐらい』のニュアンスがある時は使いにくいのような説明が求められよう。しかし、888問全ての説明を作ることは容易ではない。「風が吹き始めただけでなく、雨{こそ・さえ・すら}降り出した」は、協力者の意見(答えの範囲)がなかなか一致せず、最終的に「答えを1つ選べ」とし、答えは「さえ」とすることで5名の協力者の同意を得たが、その理由の説明も難しい。この意味で、説明の作成もかなり困難な作業になるとと思われる。今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

脇中起余子(2016) 聴覚障害児に対する言語指導. ろう教育科学会誌. 57(4):167-180. 査読論文

〔その他〕

ホームページ等

<https://tkbj.cosmocity.net/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

脇中 起余子 (WAKINAKA, Kiyoko)
筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・准教授

研究者番号：30757547

(2)研究協力者

佐坂 佳晃 (SASAKA, Yoshiaki)

鈴木 牧子 (SUZUKI, Makiko)

藤本 裕美子 (FUJIMOTO, Yumiko)

高井 小織 (TAKAI, Saori)

宮下 恵美子 (MIYASHITA, Emiko)